



冷徹クール男子は、彼女の前でだけ偏愛過保護に変貌する

完結編 【体験版】

冷酷クール男子は、彼女の前でだけ恋愛過保護に変貌する
完結編



画像はPixAIで作成しています

【本作をお読みいただく前に】

本作は、ヒロインを愛するあまり狂った独占欲を見せるヒーローとのロマンスを描いた作品【幼馴染AV男優が私にだけ独占欲を向けてくる】のスピノフ作品の続編です。

こちらは体験版となっております。

【特典の過激な描写に関するご注意】

特典につきましては、一部、過激な性描写（ポルチオ・羞恥）を含んでおります。

シチュエーションおよび、過激な性描写が苦手な方は、閲覧をお控えいただくか、十分ご注意の上でお楽しみいただけますようお願いいたします。

登場人物紹介

・金崎 悠真（かなざき ゆうま）

本作のヒーロー、人気イケメンAV男優

ビジネスライクな性格。私生活でも割り切った関係を好むが、陽菜と出会ったことで、その冷徹な仮面にひびが入り始め——！？

・橋本 陽菜（はしもと ひな）

本作のヒロイン、カフェとバーのアルバイトを掛け持ちする。

派手な見た目のせいで『軽そう』と誤解されがちだが、本当は好きな人と一歩ずつ愛を育みたいと願う、健気な純情女子。

1、お揃いのパジャマと、愛おしすぎる日々

「ん……」

まぶたをくすぐるやわらかな朝の光に、ゆうま悠真の腕の中でひな陽菜がゆっくりと身動きした。

胸元に伝わる、彼女のかすかな体温と吐息に悠真の心は満たされた気持ちでいっぱいになる。好き
な人と一緒に朝を迎える事が、こんなにも愛おしいものだとは思ってもみなかった。

陽菜に気付かれないように視線を落とすと、そこには寝ぼけ眼で自分を見上げている愛しい恋人の
顔があった。

二人が身に纏っているのは、一緒に新生活を始める時に『せっかくだからお揃いにしたいな』と、
照れくさそうに陽菜がねだってきたブルーのパジャマだ。

(……本当に、陽菜との同棲が始まったんだな)

寝起き特有の温かい体温と、陽菜から漂う甘い香りが悠真の胸を満たしていく。かつては『一人の人間に執着するなんて効率が悪い』と割り切り、性欲も女性も仕事の記号としてしか見ていなかった。

そんな自分が、今ではこうして朝目覚めた瞬間に隣にいる彼女の存在に、これ以上ない充足感を覚えていく。

悠真は目を閉じたまま息を殺し、自分の頬へそつと手を伸ばそうとしてくる陽菜の気配を伺っていた。

無防備で、愛おしくてたまらない。そのまま触れられる直前で、悠真は静かに瞼を開けた。

「……起きてたの、陽菜」

「ひゃいっ!?!」

着心地の良いコットン生地越しに伝わる陽菜の華奢な腰を、悠真は腕の中に強く引き寄せる。陽菜は可愛らしい悲鳴を上げて跳ね上がった。

逃がす気など毛頭ない悠真は、瞬きをする間もなくぐつと腕に力を込め、陽菜の華奢な身体を隙間なく自分の胸元へ密着させる。

「ゆ、悠真……君っ！ 起こしちゃった……？」

「ううん。陽菜が俺のこと凝視してるから、気付いた」

「見てないよっ」

「嘘つき。顔、真っ赤」

動転して言い訳をつむぐ唇が愛おしくてたまらず、悠真は小さく微笑むと、彼女の言葉を遮るように唇を覆った。

「んむ……っ、ふぁ……っ……」

夜を引き戻すかのような濃密で熱いキスに、陽菜の唇から甘い声が漏れた。ただ重ねるだけでは足りず、悠真はすんなりと口内へ舌を滑り込ませ、陽菜の甘い舌を優しく絡め取っていく。

朝の静かな寝室に、ジュ、と卑猥で甘い水音が響いた。陽菜の身体が徐々に熱を持ち始める。悠真が教え込んだ甘い快楽に、彼女の身体は従順に反応するようになってきていた。

気付かないふりをしているけれど、自分でも呆れるほど、彼女のすべてを求めてしまうようになっていた。

（誰にも渡したくない……誰にも、邪魔されたくない……）

その気持ちを胸の奥に隠したまま、悠真は陽菜のすべてを求めて口づけを深める。

「んっ、あ……ゆ、うま、君……朝から、だめだ……から」

「朝だからいいでしょ……お揃いのパジャマ着て、俺の腕の中で気持ちよさそうに眠ってる陽菜が悪い」

陽菜が悪いと言いながらも、自分の声の内側には、隠しきれない強い独占欲が滲んでる。

陽菜を自分だけのものにしておきたい……そんな欲に突き動かされるまま、悠真はパジャマの裾からすつと手を差し入れ、彼女の細いウエストを撫で上げた。

「あ……っ……そこ、気持ちいい……っ」

「陽菜、すごい可愛い。同棲して本当によかった。朝起きてすぐに、こうやって触れられるんだから」

「私も……すつごく、幸せ……だよ」

陽菜の言葉に胸を熱くしながら、悠真は手慣れた仕草で彼女のブラジャーのホックを外した。パジャマ越しに伝わるやわらかな胸の膨らみを優しく揉みほぐし、指先で先端を小さく弾くと、陽菜の下腹部がキュンと甘く愛液を滲ませる気配が伝わってくる。

お揃いのパジャマに包まれた愛しい彼女をきつく抱きしめ、悠真は朝の光の中で何度も何度も呼吸

を奪った。

自分をこんなにも狂わせる存在を得た幸福を噛み締めるように、小柄な身体を抱きしめ続けた。

〔中略〕

「悠真君、お疲れ様。あたたかいお茶淹れたけど飲む？」

振り返ると、マグカップを手にした陽菜が立っていた。

ふわふわの部屋着に身を包み、人好きのする笑みを浮かべながら悠真の脇にそっとお茶を置いてくれる。

「ありがとう。まだ起きてたの？」

「うん、なんだか目が冴えちゃって。悠真君、あんまり無理しないだね」

平気、と言いかけて、悠真は陽菜の瞳の奥にかすかな翳りがあるのを見逃さなかった。

陽菜はいっだって明るく、健気に笑っている。

だが、悠真には痛いほどわかっていた。彼女が本当はどれだけ寂しさを耐え忍んでいるか、ということ。

同棲を始めれば、もっと二人で過ごす時間が増えると思っていたはずだ。

それなのに、悠真は休日のランチが終われば机に向かい、仕事の合間も勉強に費やしている。夜もベッドに入るのが遅くなり、二人でゆっくり会話をする時間すら減っていた。

（――陽菜はきっと、自分のせいで俺に無理をさせてるって思ってるんだろうな……）

陽菜の表情や仕草から、彼女の胸中が透けて見えた。

父親に厳しい条件を出されたことを陽菜も察しているのだろう。悠真に重荷を背負わせてしまった

と、彼女なりに責任を感じているのだ。

だからこそ、『寂しい』とも『もつとかまってほしい』とも言わない。わがままを言って悠真の邪魔をしてはいけなないと、気持ちを押さえているのが手に取るようにわかる。

「……悠真君、お茶、冷めちゃうよ」

ぼんやりと見つめてくる悠真に、陽菜が気遣わしげに微笑みかける。

その笑顔があまりにも健気で、そしてあまりにも切なくて、悠真の胸がキュツと締め付けられた。

(……俺のせいで、陽菜を不安にさせてる)

陽菜を幸せにするために頑張っているはずなのに、一番近くにいる彼女を今、寂しがらせて不安にさせているという矛盾。

父親に認められたいという焦りのあまり、陽菜の表情の裏側にある不安を置き去りにしてしまっていたことに、悠真は強い反省と自己嫌悪を抱いた。

悠真はペンを置くと、陽菜の手首をそっと掴み、自分の膝の上へ引き寄せた。

「えっ!？ ゆ、悠真君……?」

突然抱き上げられて膝に乘せられた陽菜が、パタパタと手を慌てさせる。

悠真はそんな陽菜の細い腰を抱きすくめ、彼女の首筋に深々と顔をうずめた。甘い彼女の香りが胸いっぱい広がる。

「勉強まだ途中でしょ?」

「充電が必要」

低く呟くと、陽菜の身体が小さくぴくつと跳ねた。

背中に回された彼女の手が、遠慮がちに、けれど愛おしそうに悠真のシャツをぎゅつと掴んでくる。

「ごめん、陽菜。最近、あんまり話せてなくて」

「ううんっ！　ううん、そんなこと気にしないで……！　悠真君が頑張ってるのわかってるし、私も頑張るから」

必死に首を振る陽菜の言葉に、悠真はより一層腕の力を強めた。

この健気で優しい愛しい存在を、絶対に手放したくない。言葉だけじゃなく、行動で安心させてあげたいと、悠真は深く心に刻む。

それと同時に、彼女の下着のホックを。パジャマの上から。パチンと外す。

「悠真、君……っ……」

膝の上に抱き上げた陽菜の口から、可憐な吐息が漏れた。

悠真が首筋に顔を埋めると、彼女の身体が緊張からかすかに強張るのが伝わってくる。普段は冷淡に人と距離を置いている自分が、こうして甘えるようにすると陽菜はいつも少しでもだけ動揺する。だが、その反応すら今の悠真には堪らなく愛おしかった。

悠真は抱きしめる腕の力を少しだけ緩めると、顔を上げて陽菜の顔をじっと覗き込んだ。

夜の静寂の中、少しだけ潤んだ大きな瞳がこちらを覗き込んでくる。

自分を気遣い、必死に健気な笑顔を作ろうとしている表情を見ると、胸の奥がキュツと締め付けられた。

「勉強も大事だけど……陽菜を放置していい理由にはならないよ」

「そんなことないよ」

「ごめんね、陽菜」

囁きながら、悠真は陽菜の滑らかな頬を手で優しく包み込んだ。親指の腹で撫でてやると、彼女の耳たぶがぽつと真っ赤に染まっていく。

「頑張ってるの、知ってるから……邪魔したくないよ」

「陽菜を放置するのは俺の本意じゃないんで」

言い終える前に、悠真はそっと唇を重ねた。

陽菜の緊張をすべて解きほぐすような、柔らかく、包み込むような甘いキス。重ねるたび、陽菜の吐息が熱を帯びていくのが唇越しに伝わってくる。

「……んっ……」

悠真は部屋着の裾からゆっくりと手を忍び込ませた。

焦らすように華奢な腰を撫で上げ、すでに外してあるブラジャーの隙間から柔らかな胸の膨らみに触れる。手のひら全体で包み込み、優しく体温を分かち合うように揉みほぐした。

目の前の愛しい存在を慈しみ、彼女の心を満たすためだけに指先を動かす。指の腹で頂にやんわり触れると、陽菜の吐息が甘さを増した。

「……ん……悠真、くん……勉強するんだよね？」

「陽菜が可愛すぎるのが悪い。今日はもうおしまい」

何かを言いかけた陽菜の言葉を、悠真は再び深いキスで遮った。今度は口内へ舌を滑り込ませ、甘い舌を丁寧に絡め取っていく。

「んむ……っ、ふう……っ……んっ」

悠真は陽菜の小柄な体をしっかりと抱きかかえて立ち上がり、キスをしながらベッドへ移動した。シートの上にそっと横たえ、隙間なく上から覆いかぶさる。

「今日は、陽菜をたくさん甘やかしたいな。声、我慢しないでいいよ」

耳元で低く囁きながら、悠真は陽菜の首筋やデコルテに優しく吸い付く。自分の焦りのせいで彼女に溜め込ませてしまった不安と寂しさを溶かし尽くしたかった。

「あ……っ、んんっ………！ 悠真君……くすぐった……あっ」

「気持ちいいでしょ？」

「う……ん……」

しがみついてくる陽菜の身体を抱きしめ返す。悠真の胸の奥で、彼女を誰にも渡したくないという深く重い熱が燃え上がる。

ゆっくりと彼女の部屋着のボタンをひとつずつ外していく。肌が露わになるたび、陽菜の白い肌が小さく震えた。

「寒くない？」

「ん……うん、大丈夫。悠真君は？」

「寒いからくつつきたい」

悠真は薄く微笑むと、自らも服を脱いで、素肌で陽菜と抱きしめ合う。彼女の鼓動とぬくもりが伝わってきて、首筋に顔をうずめながら息を深く吸った。

頭を撫でながらキスを続けると、陽菜の身体がさらに熱を帯びてくる。甘えるような声が聞こえる度に、可愛すぎて分身に血が集まってくる。

やわらかな胸を両手で優しく包み込み、指の腹でゆつくりと円を描くように揉みほぐしていく。先端を親指でそっと転がし、ただ温もりを伝えるように、慈しむように触れた。

「やうっ……んあ……そこ、……っ」

「陽菜、本当に可愛い。触ってるだけで、俺まで溶けそう」

唇を胸の先端に寄せ、ちゅっ、と音を立てて吸い上げる。陽菜の身体が痺れたように揺れた。

舌先で優しく転がしながら、もう片方の胸も手で丁寧にあ撫した。陽菜の吐息が熱を運び、細い腰が小さくくねる。悠真は下半身の布地もゆっくりと下ろし、陽菜の太ももの内側を指先で撫で上げた。

すでに熱を持った秘部に触れると、くちゅ、と小さな音がする。

「濡れやすくなったね、陽菜」

「だ、だって……悠真君に触ってもらうと、気持ちよくて……」

陽菜の恥ずかしそうな声に、悠真の胸が熱くなる。そう思ってもらえるように、大事に大事に陽菜に触れてきた。悠真の手が、舌が、分身が、すべてが陽菜を気持ちよくさせるためにあるのだと、彼女に思ってもらいたかった。

指先で割れ目を優しく割り、ぬるりと濡れた入口を優しく撫でる。クリトリスを親指でそつと包み込み、軽く圧をかけながら上下に擦る。

「んあっ……！ あ、そこ……気持ちいい……っ」

「いいよ。もつと感じて。俺に全部預けて」

中指を一本、ゆっくりと沈めていく。狭い内側がびくびくと収縮し、陽菜の背中が反った。悠真は急がず、指を出し入れしながら前壁の少しざらついた場所を探る。

見つかり、そこを優しく、しかし的確に押し上げた。

「ひゃうっ……！ ……そこ、だめ……だめえ……っ」

「気持ちいいね、陽菜。感じてくれるの嬉しいよ」

愛撫を続けながら、悠真は自分もズボンを下ろし、硬く熱を帯びた部分を陽菜の太ももに寄せる。

ガチガチになっていたが、彼女を十分に甘やかすことが先決だ。

体験版はここまでです。

続きは製品版で

お楽しみください。

